



## エコクリティシズム研究学会

事務局便り No.6 July 1, 2015

---

<http://www.ses-japan.org/>

---

### 第 28 回エコクリティシズム研究学会大会特集号

事務局便り第 6 号をお届けします。今年度大会のレジメ、会員の近況報告、新入会員のご紹介、各種委員会からのご報告とお願いを掲載しています。この事務局便りは、大会資料ともなっていますので、必ずお持ちください。

~~~~~  
戦後 70 年とエコクリティシズム——“stories come to matter”の声を聴く

SES-J 代表・伊藤 詔子

戦後 70 年というのは 1945 年以降 2015 年ということで、この時代区分に着目した最近のエコクリティシズム研究といえば、Timothy Morton の *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World* (2013) や、核汚染を一般論としてではなく、世界史の中で捉える論文を含む Serenella Iovino, Serpil Oppermann 編、*Material Ecocriticism* (Indiana UP, 2014) 等が想起される。SES-J ホームページ「エコクリティシズムのテーマ解説 11」でモートンの環境哲学全体について解説した芳賀浩一氏の記事にもあるように、*Hyperobjects* には地球の物質的ありように着目した時代認識が表明され、3. 11 原発事故後来日したモートンが、香港空港で放射線のスキャンを受ける話をエピソードに語り、国境なきトランスナショナルな汚染状況を実感し、「ヒロシマ、ナガサキ、プルトニウムで、地球世界は新しい地質学的時代に入ったのだ」としている。

地球を構成する物質的变化への懸念は異常気象や地球温暖化や氷河の融解による極地の生態系激変や海拔の上昇など多岐にわたっていることは言うまでもないが、同時に地質学(geology)は地政学(geopolitics)と密接に関わる。*Material Ecocriticism* は、「物質のナラティブ」「物語る物質」の声を聴き取ろうとする最近のいわゆる“new materialism”の動きからの論文を集め、その一篇 Cheryll Glotfelty が Peter Goin の写真集 *Nuclear Landscape*(1991)を論じながら指摘するように、物質は「社会、政治、科学、技術が絡まる多層構造のリアリティ」の網の目に絡みとられていて、それは歴史的に 1945 年 7 月 16 日世界最初の核爆発に始まるものであり、核時代以前のような、無垢でナイーブな、霊魂や精神と対立していた物質の概念とは程遠いものである。編者の 1 人 Oppermann の巻頭論文 “From Ecological Postmodernism to Material Ecocriticism *Creative Materiality and Narrative Agency*” (イタリクスは原文のママ) が、このエコクリティシズムの特徴を論じて、物質は語りの担い手(Narrative Agency)であり、「宇宙を単に空間や場所ではなく物語」と把握するという。古くから物語る森や、せせらぐ小川や河童信仰が育まれてきた日本では、この批評はもしかしたら既知の親密なものかもしれない。なお同書は、第 10 回キャンザスでの ASLE 大会の Preconference Seminar の議論が基になっている。(http://asle.ku.edu/Preconference/oppermann-iovino.php)

ところで Glotfelty がネヴァダ・ルネッサンスと呼ぶ 1990 年以降、かつてネイチャーライティングの傑作群が書かれた西部の諸領域は、今「核の西部」として、あるいは世界各地に広がる Peter Goin のいう「核の風景」のフロンティアでもあることが、冷戦後の軍事機密情報や封印されてきたマンハッタン計画の全貌を説くワシントン大学の歴史学者らのチームによる *The Atomic West: Region and Nation, 1942-1992* や *Atomic Frontier Days: Hanford and the American West* (2011) 等が論じてきた。実はそれに先立つ Goin の写真

集や、Carole Gallagher, *American Ground Zero: The Secret Nuclear War* (1993)は、核による土地の恐怖に満ちた荒廃や、土地、生き物、人間に与える深い持続的な影響の痕を視覚的にも生々しく伝えてきた。

それと関連して今こそ再読したいのが、*Atomic Ghost :Poets Responding to the Nuclear Age* (1995)で、John Bradley 編、T. T. Williams 序文による 330 ページの原爆追悼詩集である。*Atomic Ghost* はトリニティでの核爆発、広島、長崎の原爆投下、ビキニでの水爆実験、ネヴァダ・テストサイトの、核に関わる膨大な死者たちを弔い悼む、代表的現代詩人の作品 140 編を集め、リッチ(Adrienne Rich)、スナイダー (Gary Snyder)、ウィルバー (Richard Wilbur)、ギンズバーグ(Allen Ginsberg)ら米詩人は勿論、峠三吉、栗原禎子、ナナオ・サカキなどの詩も英訳して収録し、カナダ、ドイツ、中国、スカンディナビアの詩人も寄稿したもので、おそらくアメリカで出版された初めての日本やアジアの詩人と英米詩人合作の、トランスナショナルなグローバルな原爆詩集である。ブラッドリーは“Preface”をある日本女性への言及から始め、Trinity 文学のキーワードとなる Ghost をめぐって、日本への間太平洋的な意識を以下のように語っている。

“If there are such things as ghost,” says a Japanese woman in Andrew Leighton’s essay, “that day is Hiroshima.”

“Why don’t they haunt Americans?” Judging by the poems in this anthology, they do. They haunt us in many ways.

There is the fear for survival of the planet. ....The poems speak eloquently on all these topics and more, exposing how nuclear fear settled in to the very marrow of our bones”(Atomic Ghost, i)

最後の行は、比喩的意味よりも核の場所の多くで起こっている、骨に蓄積された放射性物質による身体の異常に言及しているのだと思われる。また序文「邪悪に花を手向ける」(“Throwing Flowers at Evil”)は、このアンソロジーを「集合的儀式」“collective ritual”と呼び、被爆死者への追悼行為を、「ヤキ族伝統の、イースターの儀式、邪悪に対し無数の花を投げる儀式的行為」に仮託して詳述する T. T. Williams によるものである。L. M. Silko, *Ceremony* が、邪悪な妖術 whichery である核物理学が生み出した Nuclear Bomb に対し、ラグーナプエブロの伝統的儀式を対抗させて主人公の病を癒そうとするように、ウィリアムスは、ヤキ族の世界観と儀式の力をこめた続く Atomic Ghost 詩篇が、文学の力で核化のアメリカと世界に対抗しようとする投花の儀式なのだとする。(この拙文は、2015年5月23日、立正大学における日本英文学会での拙論「Atomic West の原点に立つ Trinity Site をめぐる核の言説について—〈Trinity Saga〉のなかの Los Alamos Experience」の序説に当たるものの一部であることをお断りします。)

~~~~~

## レジメ (発表要旨)

2015年8月8日(土)

**研究発表** 9時30分—10時40分

### 1. 「封印された疫病大流行の記憶—アラスカ先住民社会の事例をもとに」

林 千恵子 (京都工芸繊維大学)

強制転住を経験せず、土地返還交渉にも成功してきたアラスカ先住民は、自然環境に依拠した暮らしと固有の文化を問題なく継承してきたように見える。しかし、実際には、米国本土とは違う形の大量死とそれによる社会崩壊、文化断絶を経験してきた。その原因は、ヨーロッパから持ち込まれた疫病の大流行である。特に、20世紀初頭に発生したインフルエンザは野火のようにアラスカ全土に広がり、各集落が壊滅状態となった。白人との接触が少なかったエスキモーとアサバスカンでさえ人口の約60%を失ったとされる。

生き延びた人々は、死体を放置して村を捨てざるをえず、疫病に無抵抗だった自民族文化に否定的になった。この生存者こそ、現代の先住民の先祖であるが、彼らはこの悲嘆と絶望の経験に口を閉ざしてきた。本発表では、Robert Fortune, *Chills and Fever* 及び当時の記録をもとに、インフルエンザ発生の状況をたどり直す。そして、辛い過去の記憶を封印したことが、ユピックやアサバスカンの現代作家 Colin Chisholm

や Velma Wallis にどのような影響を与えてきたのか、作品にはどのような形で表出しているかを明らかにする。

## 2. 「“Higher Laws”と Rick Bass における狩猟と魚釣り」

塩田 弘 (広島修道大学)

ソローの“Higher Laws”と、モンタナ州僻地の大自然の中でソローの森の思想を実践するアメリカのネイチャーライター、リック・バス(Rick Bass, 1958-)の作品における狩猟や魚釣りをめぐる世界観について考察する。バスについては、彼がモンタナに移住する 1987 年以前の経験、すなわち、高校卒業までを過ごしたテキサス州で祖父と「鹿狩り」に親しんでいた様子と、大学卒業後にミシシッピ州で地質学の専門家として行った地下の石油資源調査を、水面下の獲物を捕まえる「魚釣り」に喩えていること等を手がかりに、バスのネイチャーライターとしての狩猟行為とその思想をソローとの比較を通じて明らかにし、「狩猟文学」の文脈の中で、その自然観の是非について検討する。

### シンポジウム 10 時 50 分—12 時 50 分

#### 「ホーソンと自然」

司会 大野 美砂 (東京海洋大学)

シンポジウム「ホーソンと自然」は、ナサニエル・ホーソンの作品における自然表象を、発表者それぞれの視点から読み直すことを目的とする。19 世紀から今日まで、何らかの形でホーソンの描く自然に言及している研究は多数あるが、その自然表象を中心的なテーマとして論じたものは非常に少ない。本シンポジウムでは、これまでのホーソン研究を踏まえつつ、新たな観点からホーソンのテキストにおける〈自然〉を再考してみたい。

#### 「ホーソン夫妻の旧牧師館テキストにみる自然表象」

講師 城戸 光世 (広島大学)

1864 年にホーソンが亡くなった後、ソファイアは夫の日記を編集し、1866 年 *The Atlantic Monthly* 誌に“Passages from Hawthorne’s Note-Books”として連載した。ソファイアはそのテキストから徹底的に妻としての自分を削除したが、ホーソンが旧牧師館での生活や周囲の自然環境について語ったエッセイ、短編集『旧牧師館の苔』(*Mosses from an Old Manse*)の序文そのものにも、妻の姿は見られない。私的な生活や観念の記録を公にするにあたって、ドメスティック・イデオロギーの論理が働いているとの指摘もあるが、妻ソファイアの存在とその影響は、序文の語り手が使用する「私たち」(us)という人称以上に、ホーソンが結婚後に記したテキスト、とりわけ日常生活の描写や自然表象のなかに、ひそかな痕跡をとどめているように思われる。本発表は、「珠玉のネイチャーライティング」とも言われる『旧牧師館の苔』序文やホーソン夫妻の旧牧師館時代の共同日誌を取り上げ、二人の自然表象を比較検討してみたい。

#### 「ホーソンはサイエンス・フィクションの夢を見るか」

講師 中村 善雄 (ノートルダム清心女子大学)

2001 年ブッシュ政権下に設置された「大統領生命倫理評議会」の座長レオン・カスが、検討すべき「最初のテキスト」として短編「痣」を挙げたことは、ホーソン作品が現代医療の問題を内包していることを象徴している。文学批評の領域でも、マーク・ローズがホーソンをメアリー・シェリー以来の遺伝学的アイデアの系譜の中で重要な作家と指摘し、クラウド・ベネシュはさらに踏み込んで、ホーソンの短編をサイボーグ的想像力の視点から再解釈しようと試みている。しかし何れの研究も具体性に欠け、論じる余地は多い。そこで本発表では、ホーソンの短編のなかでも特に自然の身体を改変する物語「ラパチーニの娘」をサイエンス・フィクションとして読み、そこに内在するバイオテクノロジーとの親和性について考察してみたい。

## 『大理石の牧神』におけるホーソーンの世界観

講師 稲富 百合子 (福岡大学)

ホーソーンの世界観を舞台とした作品『大理石の牧神』(1860)では、イタリアの風景が緻密に描写されているが、そこにはホーソーンの世界観、芸術観、宗教観を読み取ることができる。地上の楽園としての自然(神話的世界、ユートピア的自然)や、太古の昔と現在を繋ぐ長い歴史の中で築かれた伝統的な風景(廃墟、庭園、自然と人工の融合)が、絵画的な美を表象するだけでなく、宗教性や道徳性を象徴しており、語り手や登場人物が積極的にその風景の解釈を試みていることから、登場人物の眼前に広がる自然は、見る側の心象風景として解釈されうる。本発表では、登場人物たちの魂の救いの問題にも関わってくるホーソーンによるイタリアの自然表象を考察したい。

## 「ホーソーン晩年の戦争紀行文に描かれたアメリカの風景」

講師 大野 美砂

本発表の目的は、ホーソーンが南北戦争中の1862年にワシントンD.C.周辺を旅行したときの体験を記録した「主に戦争問題について」や「北部義勇兵」に着目し、そこに描かれた風景を分析することである。近年、ホーソーンの世界観への関心が高まる中、これらの紀行文を論じる伝記や批評が多数出されてきた。しかし、それらの大部分は、語り方や脚注の使用といった創作上の問題や人物の描写から、戦争や奴隷制度に対するホーソーンの世界観を探るもので、風景描写に注目するものはほとんどない。発表では、ロイツェの壁画に対するホーソーンの世界観のコメント、戦場や軍事施設の描写、逃亡奴隷の描写などに焦点を当て、ホーソーンが南北戦争中に発表したこれらの作品の中で、ナショナリスティックな空間認識を否定していることを明らかにしたい。

**特別講演** 15時10分—16時10分

## 「米国のマイノリティ女性および日本の現代女性作家における「山姥的想像力」 ——ジェンダーとエコロジーの観点から」

小林 富久子(城西国際大学)

かつて私は日本の古典や民話で度々忌むべき存在として語られてきた「山姥」という形象に着目し、それを日本の現代女性作家たちがいかに家父長制批判の目的で効果的に流用しているかを考察したことがある。最近になって、米国の少数民族女性の作品にも類似の女性像が少なからず登場することに興味を覚えたのだが、その際、注目したのは、後者の「山姥」的女性の物語にはエコロジー的観点が濃厚に見られるという点である。従って、この話では、従来ジェンダーからのみ見直されがちであった日米両国の女性作家による「山姥」的女性像をエコロジーの視点からも捉えたい。グロリア・アンサルドゥーア、ジュエル・パーカー・ローズ、ルース・オゼキ、津島佑子、伊藤比呂美等を取り上げる予定。

~~~~~

## 近況報告

原田 和恵

4月初旬に、“Japanese Women’s Science Fiction: Posthuman Bodies and the Representation of Gender”という題名の博士論文で口頭試問を受け、ワシントン大学セントルイスで博士課程を終え、ようやくPh.D.を取得することができました。当初は比較文学でしたが、東アジア言語文化学部の所属になり、とても聡明で親切なアドバイザーに恵まれました。また時間はかかりましたが、Women, Gender and Sexuality Studiesの修了書も取ることができ、充実した博士課程を過ごすことができました。



5月15日には卒業式が開かれ、全体で行われる卒業式と博士課程の学生にはアドバイザーからhoodをかけてもらうhooding ceremonyが行なわれました。特に印象に残ったのは、有名なドキュメンタリーの映画監督であり、名誉博士号を授与されたKen Burnsのスピーチです。ミズーリ州ということもあって、マーク・トウェインのこの引用から始まりました。“It’s not that the world is



full of fools, it’s just that lightening isn’t distributed right.” 皆さんもご存知のように、昨年8月にミズーリ州のファーガソンで黒人の若い青年Michael Brownが警官によって撃たれ死亡した事件です。Burns氏が言うように、残念ながら、アメリカではまだ人種差別が根強く残っています。そして、卒業する私たちにこう告げます。「*The Adventures of Huckleberry Finn*の話の中のHuckのような選択を迫られるかもしれませんが、その時は正しいことをし、手紙を破ることを忘れないでください」と。卒業が終わりではなく、これからさらに続くチャレンジに立ち向かわなければいけないと感じさせるとても感動的なスピーチでした。

さて、今年の8月からは、オハイオ州のオックスフォードという小さな街にあるマイアミ大学のGerman, Russian, Asian and Middle Eastern Languages and Cultures (GRAMELAC)という学部にてAssistant Professorとして、教鞭に立つこととなりました。ほぼ17,000人という中規模の州立大学で、日本語、日本文学や文化などを教えることとなります。ほとんどの学生は、オハイオ州や中西部から来るようですが、最近では中国からの留学生も、うなぎ上りで増えているようです。まだまだ学者としても教師としても未熟ですが、今後とも皆様のご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



### ★事務局より新入会員のご紹介★ (50音順)

2015年3月～6月の新入会員のご所属とご専門をご紹介します。

加藤 ダニエラ氏 (広島女学院大学、モダニズムと現代のエコ・ポエティックス、エコ・フェミニズム等)

黒住 奏氏 (広島大学大学院、現代アメリカ先住民文学)

中山 悟視氏 (尚絅学院大学、カート・ヴォネガット)

### ★各種委員会からのご報告&お願い★

#### 編集委員会より

執筆者と編集委員会のご尽力で、『エコクリティシズム・レビュー』No.8が完成いたしました。今号より、裏表紙に学会ロゴを入れることとなり、ロゴに合わせて、ジャーナルのカラーも一新されました。装いも新たにリニューアルされたレビューを、どうぞお楽しみください。ご感想は、No.8編集委員(真野、熊本、日臺、岸野)までお気軽にお寄せください。また、No.9につきましても、奮ってご投稿ください。

#### 出版計画委員会よりご報告

出版企画<エコクリティシズム研究のフロンティア シリーズ>刊行(英宝社)の2冊を報告します。

1. 書名 『スコット・スロヴィックは語る——ユッカマウンテンのように考える』(エコクリティシズム研究のフロンティア 4)

編訳者 中島美智子、2014年12月1日刊行、1800円。

2. 書名 『核と災害の表象——日米の応答と証言——』(エコクリティシズム研究のフロンティア 3)

編著者 熊本早苗/信岡朝子、2015年3月30日刊行、2400円。

シリーズ全体の構成と予定については、大会総会にて報告します。

#### 共著編集委員会より

『エコクリティシズム研究のフロンティア 別冊』(仮)(共著、音羽書房鶴見書店より2017年3月刊行予定)を企画しています。投稿希望者は29名、詳細は各執筆者に連絡済み。

## **(国際) 広報委員よりお願い**

出版や学会に関する情報を会員の皆様と共有していきたいと思っています。本研究学会に関連する内容の書籍や論文の出版、学会などについての情報を広報委員までお知らせください。連絡があったものを中心にメーリングリストとHPでお知らせしていきます。宛先：塩田 弘(shiotah@shudo-u.ac.jp)

## **ホームページ委員よりお願い**

ホームページに掲載する原稿を常時受け付けています。宛先：三重野 佳子 mieno@nm.beppu-u.ac.jp

- (1)「旅する会員」ページ：旅先や研修先などで撮られた写真を記事と一緒に郵送してください。PDFで掲載しますので、ワードなどでページに載せる形に整えてお送りください。
- (2)「エコクリティシズムテーマの概要」で、新たなテーマの提案がありましたら、郵送してください。出版委員会で掲載を検討します。

## **事務局より**

### **[会費及びジャーナル代金納入のお願い]**

会費(年会費4000円、学生会員は3000円、入会金1000円)を未納の方は、至急納入をお願い致します。ジャーナルをお買い上げ頂いた会員には振込用紙を同封しております。

### **[出版活動へのご支援について]**

学会の出版活動(現在はエコクリティシズム研究叢書1~8)に対する御寄付のご意志のある方は1口2000円で口数はご自由に、今回の叢書の出版が終わる2017年まで随時受け付けています。学会振替口座用紙に寄付とお書きいただき、会計報告でお名前をご報告してよいかどうかについて、名前を報告可、または匿名とご指示下さい。大変お手数ですが、どうぞよろしくお願い致します。

書き方例： 寄付1口2000円、名前報告可。 寄付2口 4000円、匿名。等。

### **[会費等の振込先]**

ゆうちょ銀行 加入者名：エコクリティシズム研究学会 口座番号：01380-4-96525

### **[メーリングリスト使用について]**

メーリングリストは事務局の事務連絡と、広報委員からの研究情報・会員の最新紹介などに使っています。事務連絡は事務局水野宛て(mizuno@sanyo.ac.jp)、研究情報・最新情報は広報委員塩田氏宛て(shiotah@shudo-u.ac.jp)に連絡してください。研究情報は、会員各自が学会サイトや出版社にご確認ください。メーリングリストは研究情報の交換に使用していますので、個人的情報や意見は個人宛てのメールをお願いします。また、メーリングリストでそのまま返信されるとリスト登録者全員に送信されますので、そのまま返信しないようご注意ください。

### **[住所、ご所属、メールアドレスの変更届のお願い!!]**

住所やメールアドレス・所属等に変更があった方は、平瀬洋子宛て(danbara@mpd.biglobe.ne.jp)に必ずご連絡下さい。

### **☆☆会場校委員からのお願い☆☆**

- ・パワーポイントを利用される発表者は、USBメモリーに保存し、事前に会場のパソコンでテストしておいて下さい。
- ・昼食は各自ご用意ください。近くに、コンビニ、喫茶店、パン屋、弁当屋などがあります。
- ・懇親会のお返事は谷岡知美氏(t.tanioka.wz@cc.it-hiroshima.ac.jp)まで。締切：7月31日(金)

~~~~~

2015年7月1日 エコクリティシズム研究学会事務局発行

エコクリティシズム研究学会 代表 伊藤 詔子

事務局 〒738-8504 広島県廿日市市佐方本町1-1 山陽女子短期大学 水野敦子研究室 mizuno@sanyo.ac.jp

〒739-0321 広島市安芸区中野6-20-1 広島国際学院大学 平瀬洋子研究室 danbara@mpd.biglobe.ne.jp